

ベンチャーキャピタルから 投資候補先へ提供する ビジネスアドバイスのキーポイントについて

エス・アイ・ピー株式会社 Strategic Investment Partners Inc.

齋藤茂樹

自己紹介 齋藤茂樹

齋藤茂樹は、起業家から転じたベンチャーキャピタリストである。彼のアプローチは、投資先のビジネス戦略、戦略的資本政策・提携・ビジネスモデルなどを企画し、自らのハイテクベンチャーのIPO経験や数多くのインキュベーション経験からくる視点から投資先企業の社長と同じ目線でのハンズオン投資を実施していきます。

エスアイピー・フィナンシャル・グループ株式会社 代表取締役社長 エス・アイ・ピー株式会社 代表取締役社長 ストラテジック・アイアール・インサイト株式会社 監査役 日本ベンチャーキャピタル協議会 (2008-現在) シンガポールVC&PE協会 会員

1961年生まれ。東京大学経済学部卒業後、85年に民営化一期生としてNTTに入社。大企業向け通信ネットワークの販売・構築、料金・サービス契約約款のデザイン、認可業務等を担当、94年退社。97年、米国マサチューセッツ工科大学(MIT)スローンスクールにてハイテクベンチャーの経営を学び、MBA取得。その後、米国ネットスケープ・コミュニケーションズ入社、日本市場でのポータル・ビジネスを統括。(株)デジタルガレージでは、公開期の中心メンバーとして参画、代表取締役として大手企業への



戦略的インターネット・ソリューションを提供。大企業とともに新規事業を立ち上げる手法「スポンサード・インキュベーション」を開発。2004~11年まではデジタルハリウッド大学院の専任教授として「通信と放送の融合における I T ビジネス論」「ベンチャーキャピタルビジネス論」の講義を行う。現在は、インターネットをはじめ幅広い領域で活動中。 政府からの招聘等でイギリス、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、イスラエル、ロシア、中国、インドなどの国家間のビジネス交流にも広く関わる。有能なビジネス・クリエイター。著書「イノベーション・エコシステムと新成長戦略」丸善出版。日本ベンチャーキャピタル協会理事。ベンチャー学会会員。

東京アジア発グローバルVCとしてのSIPの源流

ENTREPRENURES ARE MADE NOT BORN.

SIPでは、「この世で一番偉い人間は企業家である」という精神をもち、ベンチャー企業は、「資本主義のエンジンとなるイノベーション・システムの主役となるべき存在」と考えています。そして、起業家精神をもってベンチャービジネスを開拓し続けてきたベンチャーキャピタルとして、「企業家は生まれながらのものではなく、ベンチャーキャピタルとともにつくられていく」考えが、SIPの基本のスタンスです。



SIPは、日本にベンチャーキャピタルを誕生させた齋藤篤により創業されました

齋藤篤は、JAFCO在籍時代に日本初のLPS (Limited Partnership)であるベンチャーキャピタルファンドJAFCO第1号を設立し、その後日本アジア投資㈱、CSKベンチャーキャピタル(株)の設立に寄与し、日本のベンチャーキャピタルの草創期から発展に携わって参りました。SIPは、その齋藤篤により米国流の高いROI(Return on Investment)を実現するベンチャーキャピタルを目指して1996年に設立されました。



SIPはグローバルに展開する企業及びビジネスの「テクノロジー・ソース」から「アーリーステージ」、さらに「エクスパンション」まで企業の成長するためのクロスボーダー展開を支援します

SIPは、「アーリーステージ」にあるベンチャー企業への投資こそが、ベンチャーキャピタルが業界として成り立ちうる存立基盤であると考えています。その上で、株式公開したのちも、証券市場において健全な企業価値の成長を遂げ、円滑な市場からの資金調達ができるための「エクスパンション」の支援を提供することが必要であると考えます。「アーリーステージ」段階から、「エクスパンション」段階に至るまで、ベンチャー企業が潜在力のある製品やサービスをクロスボーダーにより大きく展開することに貢献すべく、事業戦略・資本戦略の両面から「ハンズオン」支援をしていきます。

「イノベーション・エコシステムと新成長戦略」



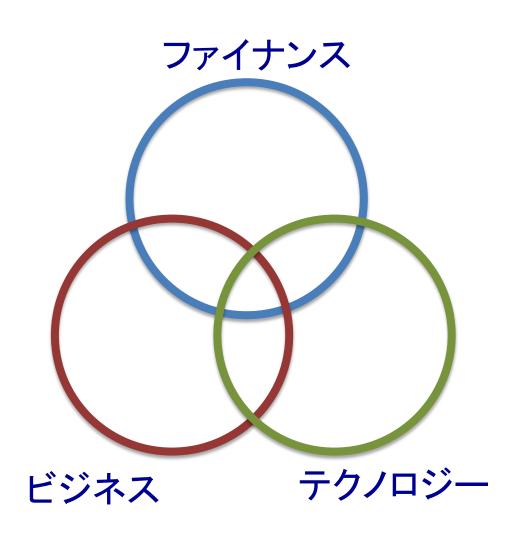
次世代日本の成長戦略の柱になるべきは、ニュービジネスの企業群とそのニュービジネスを創っていく主体になれる大手企業とベンチャー企業である。このニュービジネスの一つひとつを木にたとえると、それらの木が森というクラスターを形成するようにつくりあげ、さらに森の中からまた新しい若い木が次々と新しい成長サイクルをつくっていくような生態系システム、すなわちエコシステムをつくりあげることこそが日本の、あるいはグローバル経済における共通の成長戦略である。本書では、この日本の成長戦略を考えるために、経済成長を引き起こすイノベーションとはどういう仕組みであるべきか、さらには自律発展的なエコシステムをどうつくりあげていくべきか、について具体的に議論を展開していく。

刊行によせて (日本ベンチャー学会前会長 一橋大学教授 伊藤邦雄)

本書の著者の齋藤茂樹さんは、こうした問題を熟知し、かつ私と同じ問題意識を共有してきた豊かな将来性をもった若きベンチャーキャピタリストです。齋藤茂樹さんは、アメリカのMIT で教育を受け、アメリカの起業家精神や資本主義の実態を目の当たりにしてきました。それをベースに日本に戻ってからのベンチャーキャピタリストしての経験に照らして、未来志向でわが国の羅針盤を提示したのが本書です。一緒に夢を追いかけ、この国を再び輝かせましょう

- 第1章 資本主義とイノベーション
- 第2章 インベンションとイノベーションの発展段階
- 第3章 大企業とベンチャー企業
- 第4章 リスクファイナンス・ビジネスのあり方
- 第5章 イノベーション・マーケット
- 第6章 グローバルマーケットをもう一度考える
- 第7章 イノベーション・エコシステム創造への挑戦
- 第8章 アントレプレニュアーの生まれる社会

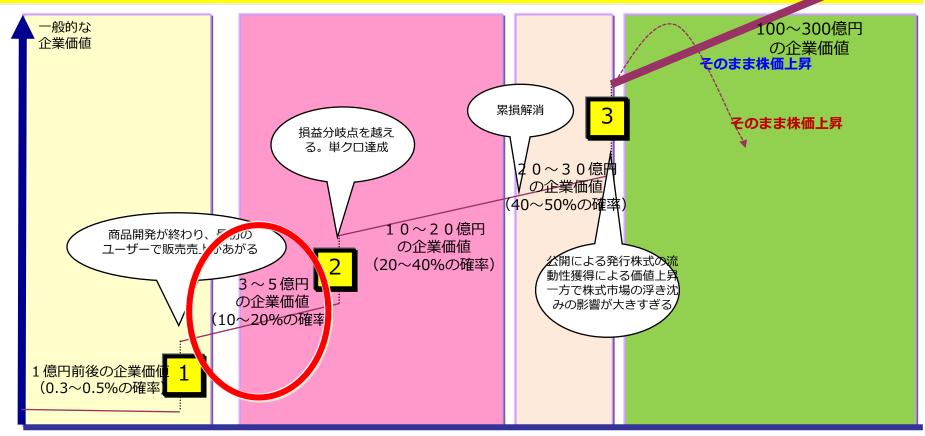
ビジネスの見方の視点



企業の発展段階

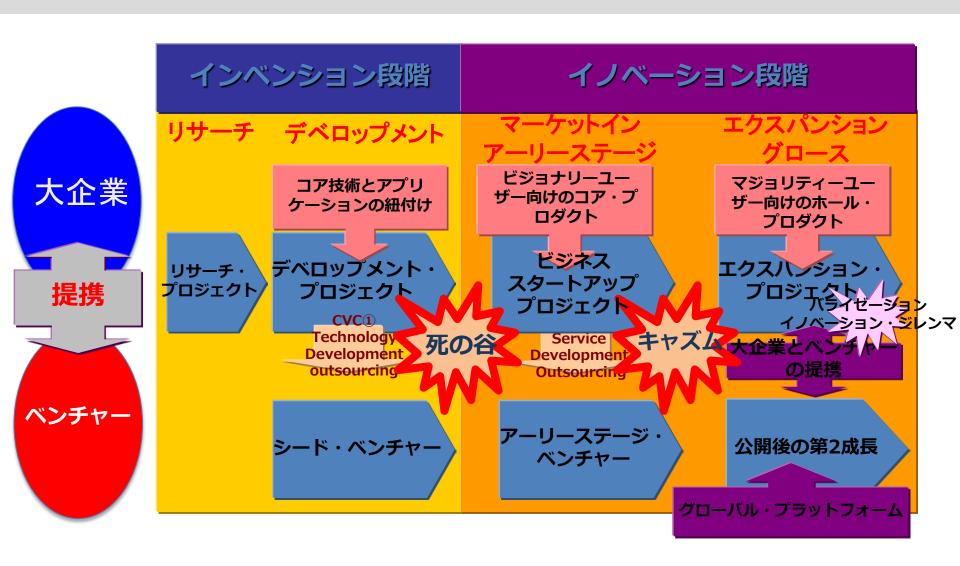
ニュービジネスの成長発展ステージ

企業価値の本質的な源泉 1 商品がコンセプトから規格品になり売れるようになる。 2 販売のチャネルが固まり販管費を越えキャッシュが増えていくようになる。3 株式公開により株式に交換価値が生まれる。 うになる。



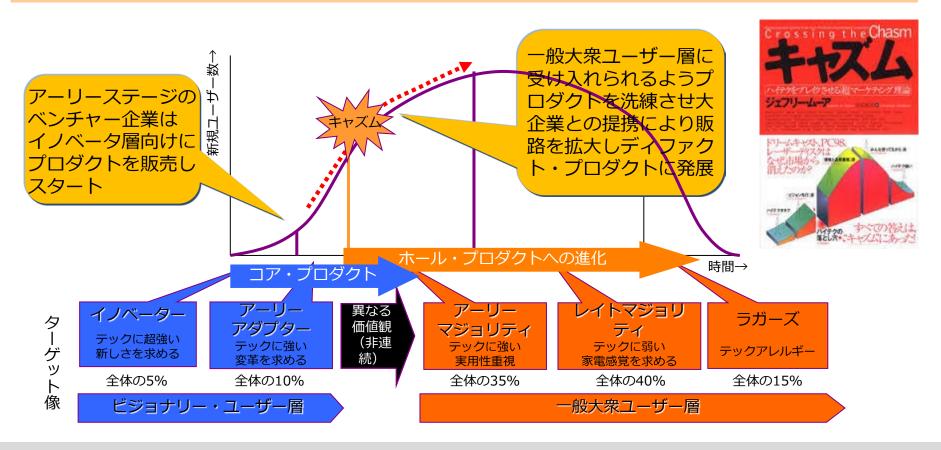
創業 【シード】 【スタートアップ】【アーリーステージ】 【エクスパンション】 【レイター】 IPO 【グロース】

ビジネスの発展段階



ハイテク・マーケティングの理論 キャズム理論

企業が開発したプロダクトはコア・プロダクトと呼ばれるイノベーター層に受けいれられる プロダクト。このコア・プロダクトを一般大衆ユーザー層に受け入れられるホール・プロダクトに商品として進化させ、販売チャネルをもつ企業と提携しプロダクトを販売することで エマージング・グロースを輩出する。



*出所: "Crossing the Chasm" by G.A. Mooreに加筆

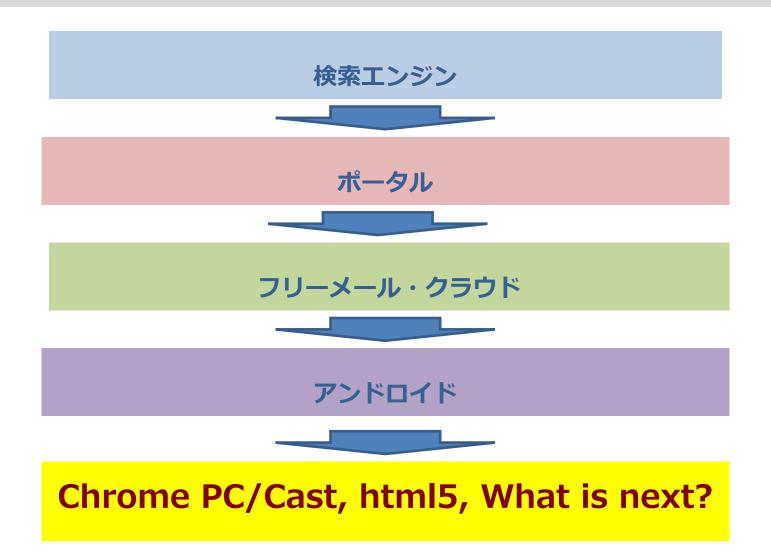
インベンションとイノベーション

蒸気機関車と、大陸横断鉄道の

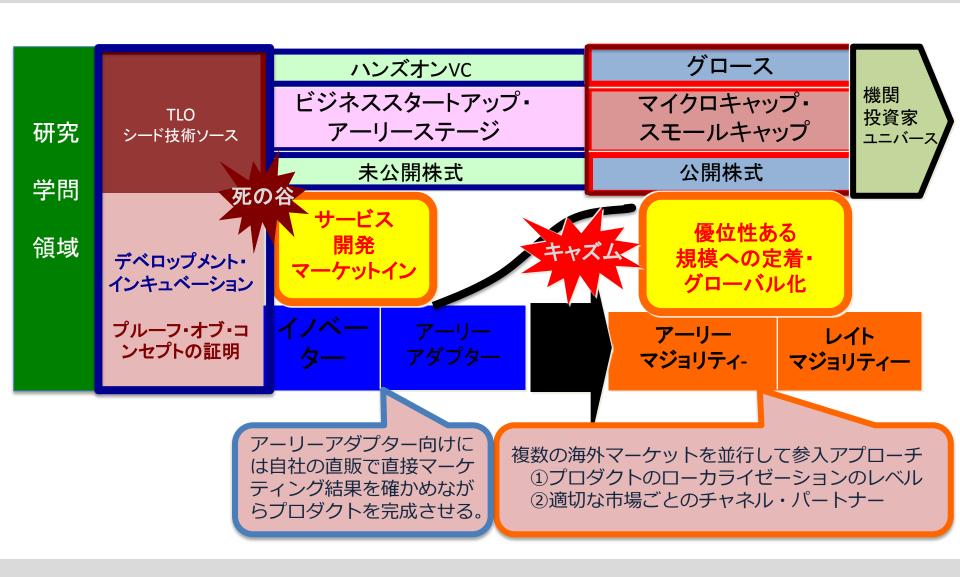
どちらが人類のために

役立ったのだろか?

グーグルのビジネスモデルの発展のケース



ビジネスデベロップメントの展開段階



ビジネスカの強さのポイント

¹³

VCが対象とする企業と伝統企業の関係性

伝統的中小企業 (銀行が主体)

中小企業型 経営で生産 してきた事業

一般商品を広く販売する事業

地銀VCはこの両 方をバランスを もってターゲット していくべき VCが対象 する企業

新しい技術 商品を基盤 にした事業



技術が織り込まれ た付加価値生産商 品を販売

オペレーション実現性と事業採算可能性

【植物工場生産野菜の利益式】

利益=P×供給量-コスト(人件費+ 減価償却費+高熱水道費用+販売・ 物流費用)

【現在の植物工場の問題点】採算性面で実用化で本格普及していくのには時間がかかる見込み

- 野菜の価格が利益率がそもそも低く採算性をとるのが厳しい
- □ 設備投資の減価償却コストがかかり、補助金前提なしでは採算性をとるのが難しい。



付加価値の高いビジネスのキーポイント

- プロフィタビリティー → テクノロジー・ブランド * 等差係数的ビジネスモデルく指数係数的ビジネスモデル
- プロフィタビリティーが等差係数的ビジネスモデルの場合のビジネス展開 =) フランチャイズ型ビジネス
- * 自らの経営ノウハウを販売してロイヤルティ収入をとることで等差係数と等比係数ビジネスの中間を狙う。
- スケーラビリティ → 全国展開より本格的には海外展開へ

株価=企業価値が上がるビジネスのキーポイント

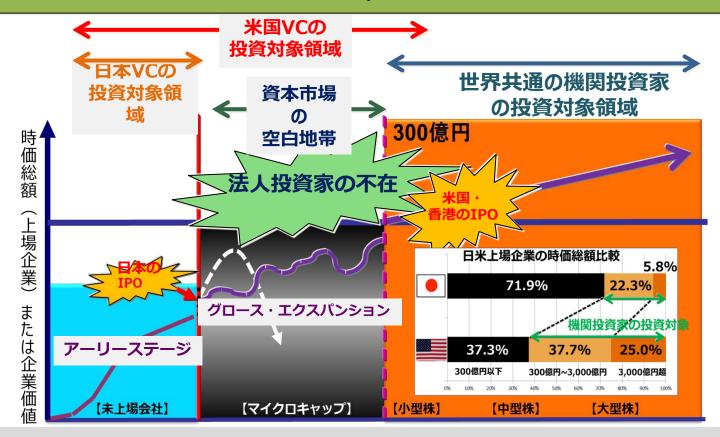
利益を安定・継続拡大できる事業基盤をつくっていくことと、PERの高いビジネスモデル・資本政策をつくっていくことはクオリティーの高い経営をしていくための両輪。

- 1. 「顧客基盤の拡大」が「収益基盤の拡大」になるモデル
- 2. 製造業モデルはVC投資では要注意(ファブレスの利用・工夫)→ ビジネスモデルを考えてアドバイスする
- 3. 株主数を拡大させていくことでより多くの法人投資家が投資できる体制の準備

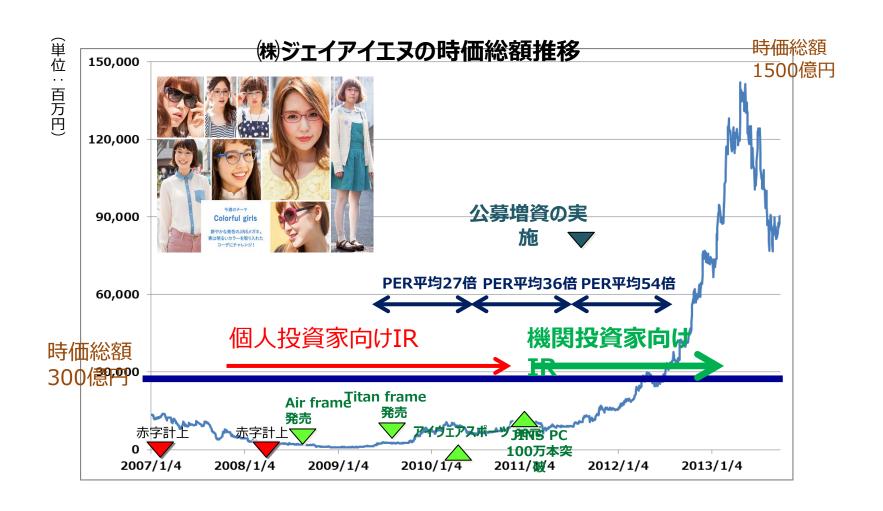
マイクロキャップ市場の法人株主の不在

【マイクロキャップのジレンマ】

- ①日本のIPOでは機関投資家不在のため successful IPOが少ない。
- ②VCのロックアップ期間後にも、EXITが出来ず株式流動性が低く抑えられる。
- ③浮動株、株主数が伸び悩み、株価(PER)が過小評価される。



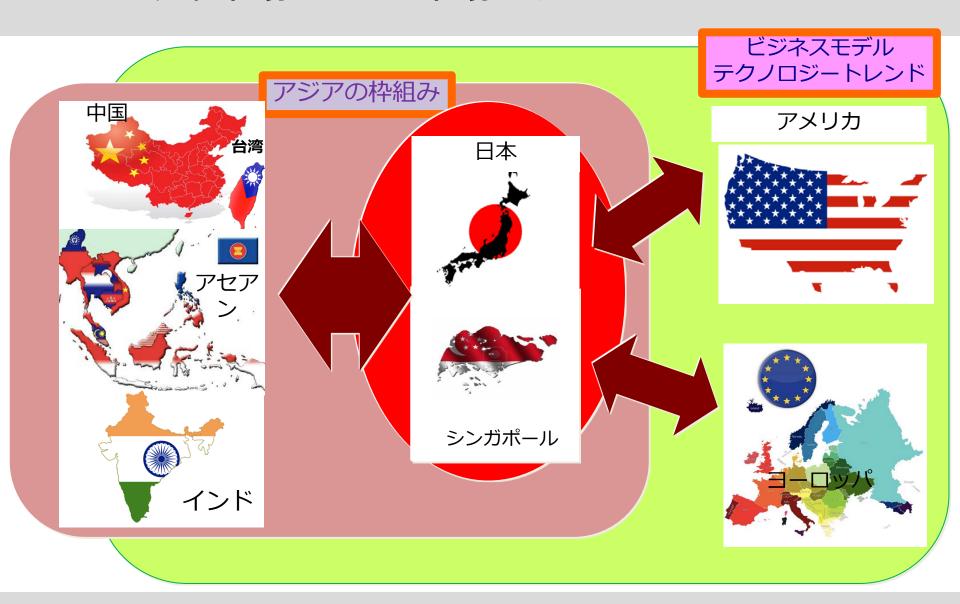
時価総額伸長の事例:ジェイアイエヌのケース



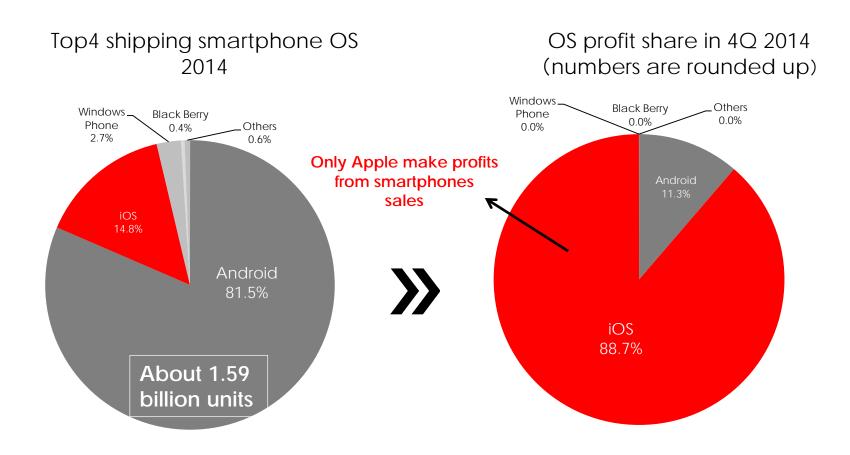
事例研究

(2) gooute

欧米市場とアジア市場のグローバルアプローチ

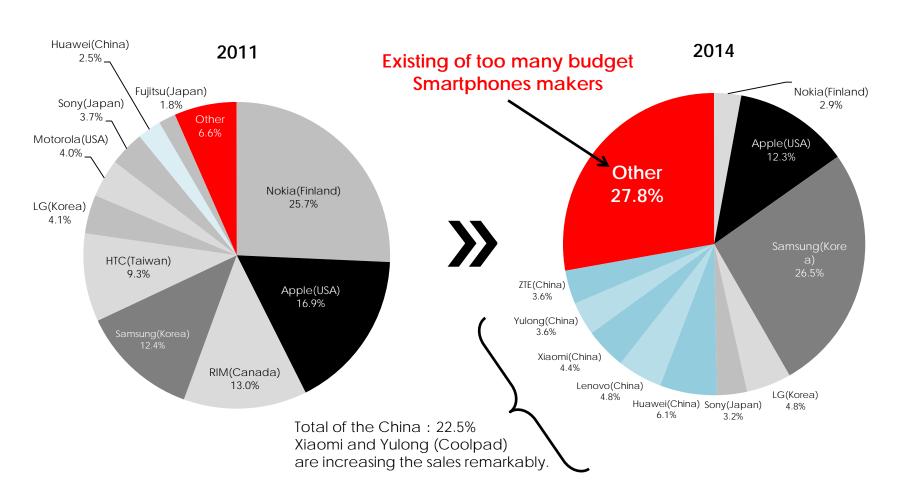


Smartphone OS Share

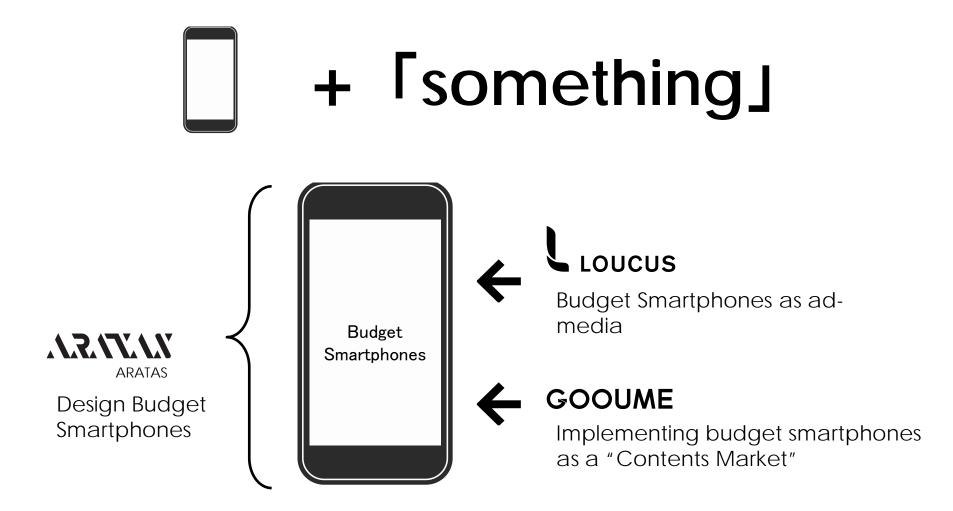


Smartphone Market Share by Manufacturers / Makers

☐ Global top 10 smartphone sales share trend



GOOUTE - Business Strategy

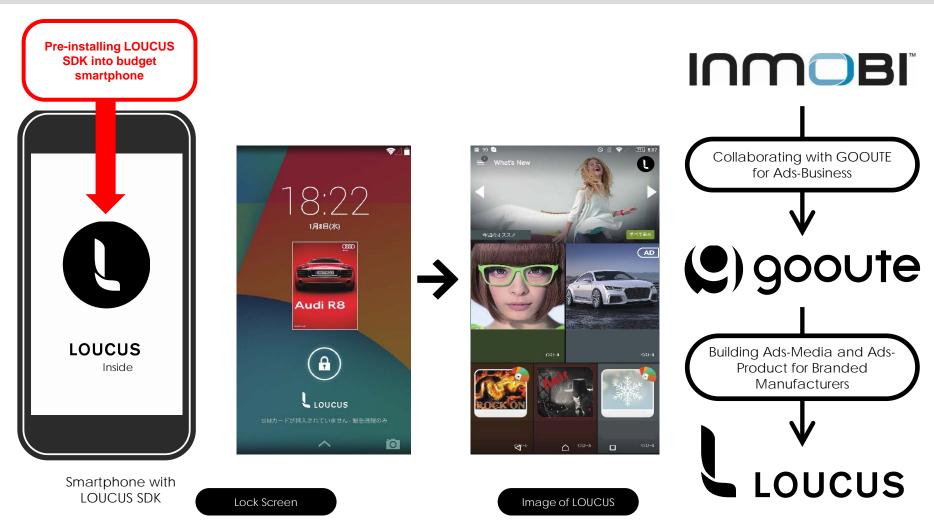


Concept of ARATAS



「This is "Designed in Japan", not in in other countries」

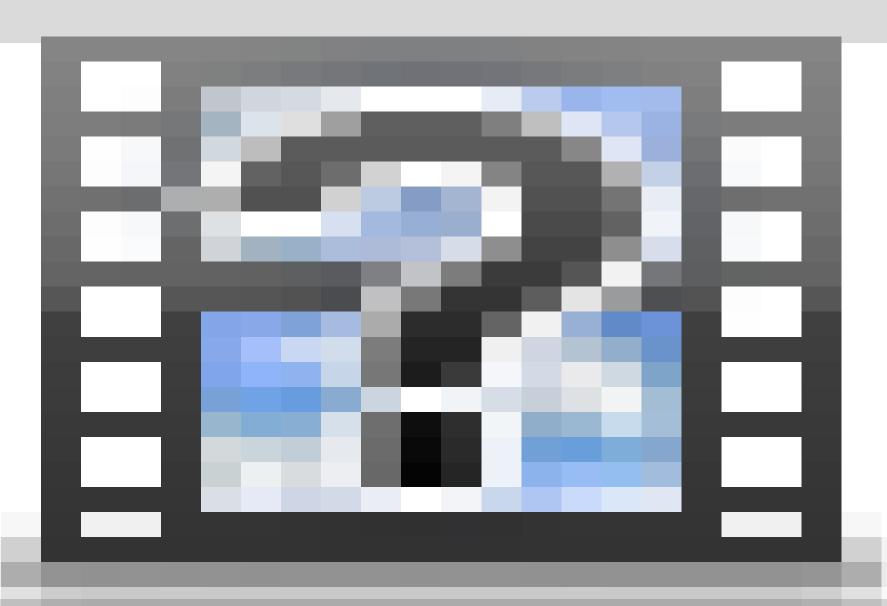
LOUCUS - Partner of Ads Business



Gooute Pte.Ltd.

www.gooute.com / info@gooute.com
Copyright (c) 2015 Gooute Pte.Ltd. All Rights Reserved

Demo



大企業とベンチャーのコラボレーション

シリコンバレーのトライアングル・パートナーシップ

大企業 = プラットフォーム

Google

ベンチャー企業=プロダクト



where 2.0 Inc.

Where 2 Technolog

ベンチャーキャピタル



SEQUOIA CAPITAL

産業金融 インターメディエタリー

大企業の既存ビジネスと新規ビジネスの関係

